## 宮城県の住民が全て消えたような衝撃

金子　淳

「僕たちはただの数字ではない」。トルコ・イスタンブールで出会った大学生の20代男性の言葉に改めてハッとした。彼の出身地はパレスチナ自治区ガザ地区。イスラム組織ハマスとイスラエル軍の戦闘により、すでに4万人以上が死亡している。

男性は3年前からトルコに留学しており、戦闘に巻き込まれることはなかった。だが、ガザ地区にはいまも家族が残る。あまりにも激しい破壊のせいで、送られてきた自宅周辺の写真を見ても「どこなのか分からなかった」という。

戦闘が始まってから、私は2回ほどイスラエルを訪れた。そのたびに至るところで死者や人質の写真を目にした。ハマスに襲撃された村はもちろん、テルアビブの広場やエルサレムの街角、空港の通路にも人質らの写真があった。この国は紛争の犠牲者を忘れないのだという強い意志がにじみ出ていた。

だが、空爆や地上戦が続くガザ地区には、死者の写真を掲げる余裕などないはずだ。現地から報道される死者の写真は、犠牲になったばかりの姿や布で巻かれた遺体が多くを占める。生前の笑顔の写真が並ぶイスラエルとの対比が際立っている。

ガザの保健当局は9月、犠牲者の名前やID番号を掲載したリストを公開した。最初の100ページあまりは10歳未満の子供で、大人が出てくるのは215ページ以降だ。全体で649ページに及ぶが、それでもカバーしているのは3万4344人で、約8割にすぎない。

死者4万人超――。この数字を日本に置き換えると、少しは身近に感じられるかもしれない。

たとえば、東日本大震災の死者・行方不明者の2倍あまり。ガザの人口は約200万人で、死者数はおよそ2%だから、日本の人口（約1億2000万人）に置き換えると、約240万人となる。宮城県の住民が丸ごといなくなったのと同じぐらいの衝撃と言えそうだ。

トルコで会った大学生はしきりに「日本ではガザはどれほど話題になっているか」とたずねてきた。忘れられるのが怖いのだという。亡くなった一人一人にどんな人生があったのか。「ただの数字」で終わらせてはならない。